

カモメに、
そして私に、飛ぶことを教
えた猫

しげる

おもしろい、と思った。

初めて本を、おもしろい、と思った。熱の残る体を起こして、庭にいる母に私は興奮しながら呼びかけたのだ。

たった一言、「この本、おもしろいね！」と。

私は大学生になった。

英語を専攻し、文系へと進んだ私だが、高校時代、自分の能力云々を全て無視して、文系に進みたくない理由があった。というよりも、理系にどうしても執着する理由があった。地球環境保全の仕事に就きたい、それが私の心からの願いだった。いつから、何故、その夢を抱くようになったのか分からず、友に問われ、親に問われ、考えた。そして、事の発端はあの本にあったのだと気づいた。

原油にまみれた一匹のカモメ。

その本の始まりは、残酷にも人間によって悲運を課せられたひとつの生き物の終わりから幕をあげる。

酷く衝撃を受けた。後に目にした教科書の数ページで、似たような運命の生き物の存在を知り、自分の研究テーマとして選んだのを覚えている。その時はっきりと、自分がそんな生き物を、環境を救ってみせると強く、責任を感じるように決意した。

ならば何故、私は国際系の道へと進んだのか。

理由は、簡単かつ残酷だ。私は、理系、と識別される科目がとことん苦手な高校生だったのだ。文系さえも苦手とするならばもはや手の施しようもなかったのだが、幸運にも私は国語、正確に言えば現代文ならそこそこな点を取る事ができた。本を愛する心があったからだと言言できる。その心はいつからかと言え、勿論、あの本に出会ってからなのである。それまでの私は、親に薦められたハリーポッター前に3分で爆睡を決め込む少女だった。たまたま風邪をこじらせ、たまたま暇つぶしに、と目を通したあの本に私は今までの自分の全てを覆された。そして、それは同時に本好きな自分が生まれた瞬間だった。

本を少しずつ読むようになった。絵本とも言える薄い本から一抱えもあるような分厚い本。やがて、小説を書くようになった。おもしろいね、と。誰かひとりでも、そう感じる心を生む力になればなら素敵だな、そう思うようになった。それは日本に限らず、世界のどこかのいつかの誰かに届く力になれば、そう願うようになった。

暑くなればまずは窓を開ける。寒くなればまずは何かを羽織る。食べ物を粗末にはしない。部屋へと入ってきた虫は外へと戻す。これは理系へと進めなかった私がしている環境保全ともなんと

も言えない偽善活動の一部だ。それだけの些細な事でも、何か自然の役にたっているかな、と思うと私はすごく嬉しくなる。そしていつの日か、手にした英語で自然環境をテーマとした本を世界へ向けて書こう、そんな夢がある。それが今の自分だ。

『カモメに飛ぶことを教えた猫』

この本は、母が姉に贈った誕生日プレゼントだ。

私がこの名を出せば、母は自慢げに胸を張り、姉は母より誇らしげに「姉に感謝しなさい」なんて言う。この本を偶然にも手に取った母に、貸してくれた姉に、この本に関わった全てに感謝したい。

何故なら、今の自分が少し気に入っているから。

未来の自分に際限ない夢をみることが出来るから。

この本に出会えて本当に良かった。